

アルメニアにおける先史文化の系譜を探る

—アルマヴィル地域における発掘調査(2018年)—

有村 誠 東海大学文学部歴史学科考古学専攻准教授
大沼 柁平 東海大学文学部歴史学科考古学専攻4年

Research on the Cultural Process in the Prehistory of Armenia: The 2018 Excavations in the Armavir Region

ARIMURA, Makoto Associate Professor, Department of History, Faculty of Letters, Tokai University
ONUMA, Shuhei Undergraduate Student, Department of History, Faculty of Letters, Tokai University

1. はじめに

西アジアの北端、コーカサス地方に位置するアルメニア共和国において、2013年より筆者らはアルメニアの考古学者と共同で先史時代遺跡の考古学調査を実施してきた。本調査の目的は、これまでに組織的な考古学調査が行われていなかったアララト盆地周辺の丘陵地帯を調査し、先史時代編年の空白を埋めることである。特に筆者らがターゲットとしてきた時代は完新世初頭(紀元前1万~6000年ごろ)である。

アルメニアを含むコーカサス地方の完新世初頭の考古学は、21世紀に入って開拓された研究分野であり、未だ未解明の問題が多い。その問題の1つが、前6千年紀にコーカサス地方の低地部に出現する新石器型の定住集落群(後期新石器文化あるいはアラタシェン・シュラベリ・シヨムテベ文化)のルーツが在地文化にあるのか、それとも外来文化にあるのか、あるいはそのハイブリッドであるのかといったコーカサス新石器文化の起源問題である。この問題に取り組むには、コーカサス新石器文化に先行する文化の実態をまず解明する必要がある。そこで、筆者らはアラガツ山南麓に広がる丘陵地帯を調査地を選び、そこで発見したレルナゴグ遺跡の発掘調査にとりかかった。

2017年の調査に引き続き(有村2018)、レルナゴグ遺跡とその周辺において考古学調査を実施した(図1)。調査は、2018年8月から9月にかけて、東海大学考古学研究室とアルメニア国立考古学民族学研究所の合同調査団によって行われた。日本側代表は有村誠、アルメニア側代表はボリス・ガスパルヤンである。なお、本調査は科学研究費補助金国際共同研究強化の支援を受けて実施した。

2018年度は2つの調査目標を設定した。第1は、レルナゴグ遺跡の発掘調査を継続し、昨年確認した建築遺構の発掘を継続すること、第2は、レルナゴグ遺跡の東に位置するカイトサイトの調査に着手し、その年代や機能に関して手掛りを得ることであった。

2. レルナゴグ遺跡の発掘

レルナゴグ遺跡は、アルマヴィルの北西約15km、マスタラ川のほとりに位置する。遺跡の背後には岩山がそびえる(図2)。日本・アルメニア調査団は同遺跡において2015年に試掘調査を実施し、2017年からは本格的に発掘調査を開始した。遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代測定によって、同遺跡は前7000年ごろに居住された遺跡であることが明らかとなった。昨年度の調査で、ピゼでつくられた建築遺構の一部が確認された(有村2018)。今年度の調査では、この建築遺構のプランを確認することと、あわせて建築遺構と同じレベルで発掘区を拡張し、同時代層の広がりを確認することを試みた。

ピゼ壁遺構を発見した地点の北側(発掘区北側)では、遺跡背後の岩山から崩落してきたと考えられる大量の岩や土砂の堆積が確認された。この土石流によって、ピゼ壁遺構の北側部分はかなり破壊されているようであった。ピゼ壁遺構の検出に関しては、ピゼ壁と周辺の土との区別が困難で、遺構プランの確認に時間がかかったが、最終的に円形の小部屋が複数重なったような遺構が確認された(図3)。この遺構はまだ完掘まで至っていないが、現時点でアルメニア最古の粘土を使った建築遺構であることは確かである。

また、発掘区を南側へ拡張したところ、表土直下で上記の遺構よりも層位的に上のレベルで新たなピゼ壁

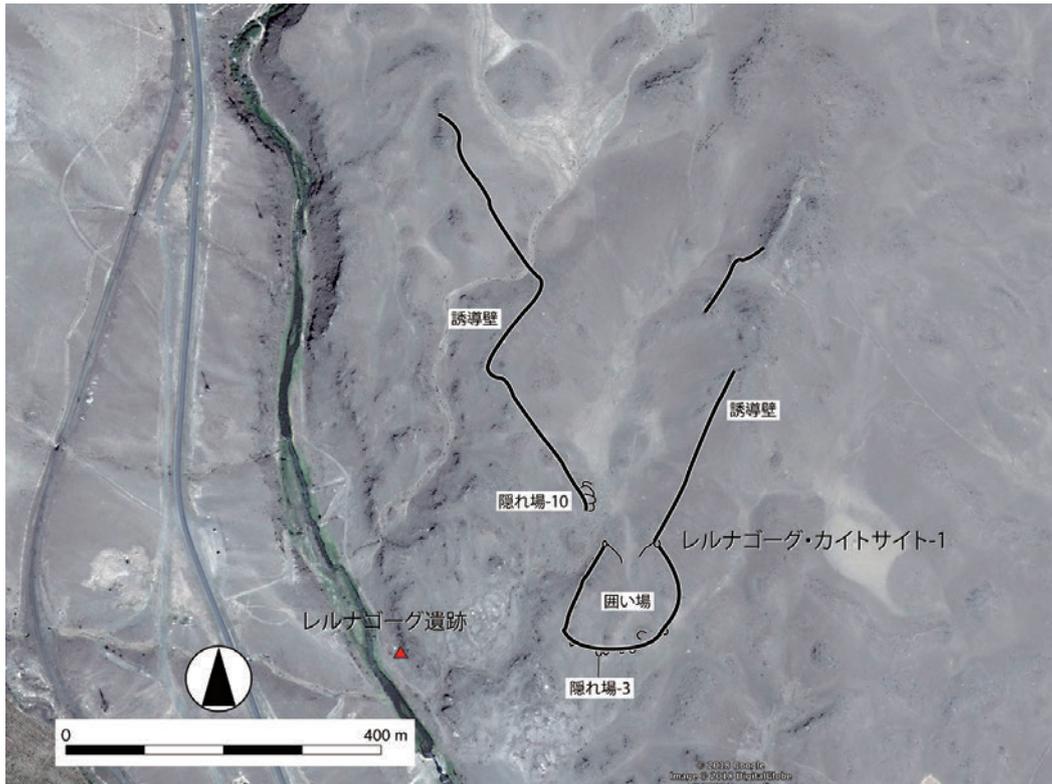


図1 レリナゴーク遺跡群(©Google Earth)



図2 レリナゴーク遺跡(西から)



図3 ピゼ壁遺構(南から)

遺構を確認した。その大部分は遺跡背後の岩山からの落石で破壊されているが、径7m以上の長円形プランであること、半地下式建築であることなどが判明し、現在のところ、アルメニア先史時代に類例のない建築遺構といえる。同遺構の帰属時期は、今後さらなる検討が必要だが、銅石器時代と思われる土器片が数点出土していることから、正確な年代は分からないものの、前5千年紀に帰属するものと予想される。

出土遺物の大半は黒曜石器であった。黒曜石は遺跡の目の前を流れるマスタラ川の川原で小形の礫として採取可能であり、遺跡ではこの礫から作られた石器が大量に出土した。黒曜石石器の中で特筆すべきは、

カムロトゥールと呼ばれるアルメニアの完新世初頭に特徴的な、側縁に連続した押圧剥離が施された石器である(図4)。黒曜石以外には、若干の動物骨が出土した。動物骨の予備的な分析では、そのほとんどはウマ科の野生動物のものであることが分かった(総合研究大学院大学 本郷一美准教授の分析による)。

3. カイトサイトの調査

カイトと呼ばれる巨大な列石遺構は、ヨルダン、シリア、サウジアラビアなどの西アジア内陸部に多数存在することが知られている。カイトの機能についてはこれまでも様々な議論が展開されてきたが、有力な



図4 カムロトゥール(黒曜石製)



図6 隠れ場-3の試掘(南西から)



図5 隠れ場-3の空中写真(写真下が北)



図7 隠れ場-10の空中写真(写真上が北)

説に野生動物の追い込み猟のための罠仮説がある。この仮説では、勢子が野生動物の群れを長大な「誘導壁」に沿って「囲い場」へと追い込み、そこで「隠れ場」(囲い場に附属する小部屋)に隠れていた射手が動物を捕殺するというカイトの利用法が想定されている。

アルメニアでカイトサイトがはじめて確認されたのは比較的最近のことで2010年である。これ以降いくつかの調査隊がサーベイ調査や試掘調査を行ってきた。これらの先行研究の中には、アルメニアのカイトサイトは前期青銅器時代の所産とする見解がある。しかし、こうした年代観はカイトサイトで表採した遺物を根拠にしていることが多く、アルメニアでカイトサイト自体が発掘調査された事例は少ない。

レルナゴグ遺跡の東側に位置する台地上にも2基のカイトが存在する。2018年度には、そのうち西側のカイト(レルナゴグ・カイトサイト-1)を対象に考古学調査を実施した。レルナゴグ・カイトサイト-1では全長約750mの列石遺構が地表面に確認できる(図1)。同遺跡のカイト遺構は、最大径約170mほど

のいびつな円形プランの囲い場とその囲い場から伸びる2本の誘導壁から構成される。さらに、このカイトには10個の隠れ場が確認できる。今回の調査では、2つの隠れ場遺構を対象に、遺構の構造の確認と遺構に伴う遺物の発見を目的として、試掘調査を行った。隠れ場-3は、囲い場の南側に接する長軸の長さ約8mの矩形プランの遺構である(図5)。遺構の壁は大型の石が1列配置されただけのシンプルなものであった。試掘を行ったところ、壁は石を概ね一段置いただけであることが確認された(図6)。トレンチから出土した遺物は3点の黒曜石破片を除くと皆無であった。

隠れ場-10は他の隠れ場と異なり誘導壁に接している。その最大長は約45mを測り、5つの部屋に仕切られている(図7)。上述の隠れ場-3と同じく、石列は1列からなる。試掘を行ったところ、やはり石壁は石を一段置いただけの簡素なつくりであることが分かった(図8)。若干の出土遺物があり、ロクロ目のある土器片や黒曜石破片などが数点出土した。隠れ場-10から出土した炭化物1点を放射性炭素年代法で測定した



図8 隠れ場-10の試掘(北西から)

ところ、15～17世紀という極めて新しい値が得られた。出土した土器片も中世以降のものとなしことから、同隠れ場遺構の年代は極めて新しいものであると推測される。これまでの先行研究を踏まえると、カイトサイトは青銅器時代や鉄器時代といった紀元前に遡る建造物であると考えられる。つまり本試掘調査の成果が意味するところは、カイトサイトの中には長い年月にわたって利用された遺跡もあるということである。今後カイト本来の構築年代を探るには、カイト構築時の遺構で試掘調査を行う必要があるだろう。

4. おわりに

2018年度の重要な調査成果としては、レルナゴーク遺跡に関しては、(1)前7千年紀初頭の円形遺構の検出、(2)より新しい時期(銅石器時代?)の半地下式建築遺構の発見、などがあげられる。レルナゴーク・カイトサイトに関しては、カイトの付属施設の中には後代に増改築されたものがあることが判明した。今年度の調査成果を踏まえて来年度以降もレルナゴーク遺跡群の調査を継続していきたい。

2018年度のレルナゴーク遺跡発掘調査隊のメンバーは以下の通りである。東海大学参加者：有村誠、宮本由子(修士1年)、大沼柊平(学部4年)、高梨綾子(学部3年)、小峰彩椰(学部2年)、増田昂平(学部2年)、アルメニア側参加者：Boris Gasparyan、Artur Petrosyan、Ani Adigoyalyan、Dmitri Arakelyan、Samvel Nahapetyan

■参考文献

- ・有村誠 2018「アルメニアにおける先史文化の系譜を探る—アルマヴィル地域における発掘調査(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』29-33頁 日本西アジア考古学会。